

---

# BGM

はしもと なおや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BGM

### 【コード】

N0563V

### 【作者名】

はしもと なおや

### 【あらすじ】

僕たちのなかには必ずBGMが流れています。それは意識するべきものではないのです。BGMですから。

僕らのなかには必ずBGMが流れている。それは例えば夕暮の静かな波音だとか、鳥のさえずり、学校の校歌、ポップミュージック、風鈴、恋人のささやき、渋谷のわけのわからない騒がしさ……世の中の音のなかで僕たちのBGMにならないものはない。それは、僕たちが生きている間永遠に流れ続ける。歳を重ねるうちに時々変わることもあるが、生まれたときから死んでいくまでずっと僕たちのなかにはBGMが流れている。けれど、僕たちが流れていることに気がつくことが稀なのだ。BGMなのだから。僕はその存在に気がついたので。

日曜日の夕方、テレビでニュース番組を見ているときだ。ニュースは天気予報をしていた。確か梅雨の時期で、その週のほとんどが雨の予報になっていた。僕は、天気予報をさほど気にはせず淡々と見ていた。天気には従うしかないと考えているからだ。雨なら雨の準備が必要だけど、天気に対していちいち嘆いていてもキリがない。雨の準備、ということを考えてとき、傘がなかったのに気がついた。明日会社に行く前に近くのコンビニで買えばいいか。そう思ったときに、突然、どこかから音が聞こえてきた。とても小さい音だ。

ナニカキコエル。ミミヲスマセ。

僕はその音を聞き分けるのに苦戦した。聞き取ろうとすると風のように通り過ぎていったのだ。テレビの天気予報は終わって、水着のアイドルがビールを飲むCMになっていた。彼女の胸はそれほど大きくなかったが、ウエストが細いため強調されていた。背景にはまぶしい太陽と海辺が映っていた。波の音。いや、違う。目をつぶろう。僕はいつたいどこにいるんだ。この音楽をどこで聞いたのだ

ろう。もう少しだ。僕は手に握っていたリモコンでテレビの電源を消した。肺から全ての空気を追い出してから、深く静かに息を吸い込む。全身から力が抜けて、部屋のなかにいるという感覚がなくなる。ぼんやりとした存在を認識しているだけだ。

玄関のチャイムが鳴った。

目を開けて、ソファーから立ちあがり玄関へと向かった。ドアを開けると葬式にでもいくような黒い服を着た美しい女性がそこには立っていた。年齢は30歳前後だろうか。膝くらいまでのスカートで足が見えたが、ほとんど食べ物を食べていないのではないかと思うほど細かった。美しいのだけど、僕はその女性を見てもやしを想像した。

「なにかご用ですか」

「聞こえたんですね」僕はその女性が何のことを言っているのか理解するのに時間がかかった。もう一度女性は言う。「聞こえたんですね。あなたのなかに流れるBGMが」

BGM？ 宗教の勧誘だろうか。

「何かの勧誘ですよ。僕はまだ会社に入ったばかりで忙しくて金銭的にも時間的にも余裕がありません。できれば他を回ってほしいのですが」

そのとき気がついたのだが、その女性には表情という表情がなかった。微笑んでいるのだけど中身が全くないのだ。

「そうではありません。BGMが聞こえたというのはとても危険なことなのです。だから、どうにか食い止めなければいけないのです」「いや、いいんです。僕はこれからやるのがたくさんあるんです少し玄関のなかに足を踏み入れようとしていた女性を押し出し、鍵を閉めた。外からはないか言っているのが聞こえる。アパートの他の住人にも聞こえてしまうのだろうか。けど、勧誘に引っ掛かるよりは良い。」

僕は再びソファアの上に寝転がり、リモコンでテレビの電源を入れた。さっきと同じ水着のアイドルのCMが流れていた。そのCMが終わったあと、ちょうど19時ちょうどだーバラエティー番組が始まるはずだった。しかし、違う番組が始まった。テレビの画面にはステージだけが映し出されている。それほど大きくはなさそうだが、学校の体育館を思い出す。今日は特別番組なんだな。そう思って、ただ見ていた。

画面の右上に出ているデジタル時計は19時6分を示した。さすがにおかしいのではないか。リモコンで他のチャンネルに変えてみる。しかし、どの番組も同じ画面が映っていた。僕の頭は考えるのをあきらめた。もう外に出て頭を冷やそう。

そのときだ。はつきりと聞こえてきた。リコーダーの音。エーデルワイス？

テレビの画面はステージだけを映したままだ。テレビさえきれば、と思い電源を切ったが、「エーデルワイス」が流れたままだ。音は段々と大きくなる。僕は耳を塞いだ。が、「エーデルワイス」はまだ流れ続けている。

もう梅雨は明けて、夏となった。他の音も聞こえるのだけど、「エーデルワイス」は未だに繰り返し演奏されている。僕は、もうこの生活に耐えられそうもない。BGMは意識するべきものではないのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0563v/>

---

BGM

2011年10月8日18時08分発行